
屋根より高く

北咲希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

屋根より高く

【Nコード】

N6970D

【作者名】

北咲希

【あらすじ】

私は今日も屋根へのぼる 春夏秋冬、四季を通して景色を、姉弟を、友人を見つめ続けた”もの”の物語。童謡を題材にしています さて、主人公は”だれ”でしょうか。短めのオムニバス形式です。

春 その1

私は今日も屋根へのぼる。

やわらかな春の日だった。雪が溶け、秋の枯れ葉がしめったままアスファルトに張り付いているのが分かるようになった。生命力の強い雑草は早速、我先にと地から頭をのぞかせている。黒々とした豊かな土に、まばらに散る緑。

まだ少し冷たさを秘めて、けれども暖かさをまとい始めた風に、私は心地よくなって身を委ねた。

淡い水色の空には、うつすらと雲に身を潜める陽が照っている。ぼおつと霞むような白雲に紛れた太陽は、穏やかな光を地上に差し向けていた。

冬の匂いは、確かに残っている。しかしあと少しもすれば、裸の木々も薄緑をそつと芽吹かせるだろう。

姉が私を見てにつこりと微笑んでいる。細くて白い手を振って、私を見送っているのだろう。陽に照らされる笑顔は明るく、晴れやかだった。

少し強い風が吹いた。

名残惜しいけれど、今日はここまでだ。

私も姉に小さく手を振って、出発することにしよう。

外に出るのは久しぶりだった。

いつの間にか庭は美しい花々の住み処となっていた。そよ風が吹くと、チューリップは一斉に頭を振った。赤、白、黄色。鮮やかな色合いの花びらでそつと蜜蜂を包みこむ。そんな頭を振りながら、

チューリップは太陽に向かってやわらかに揺れている。

視線を移せば、木々がほんのりと緑に身を染めているのが目に入った。ごつごつとした焦げ茶の幹に、複雑に絡み合う梢に芽吹く青葉は爽やかに映えた。

枝葉の向こうに透ける空は青く、ふわりふわりと白い雲が穏やかに浮かんでいた。眩しすぎない日光が気持ちいい。

私は今日、初めて屋根へ上った。

濃い緑の屋根は平らかで、広がった。淵が盛り上がったつくりで、先日降った雨が水溜りとして残っていた。屋根の上に切り取られた青空を覗き込めば、小さな水溜りをゆっくりと雲が横切って行った。ふと、隣の家を見れば、偶然に窓の外を見ていたおばさんと目が合った。おばさんは私を見て豪快に笑った様だった。口がぱくぱくと動いて何かを言った様だったが、窓越しではその声も届かない。さて、今日はこの辺で終わりにしようか。

春 その2

辺り一面が暗かった。

冷たい夜風にあてられて、私は小さく身を震わせた。しん、と静まりかえった住宅街は昼間とはまるで違う。暗闇をはらんだ路地は薄暗い。オレンジの街灯があやしく辺りを照らしているが、その灯りはかえって夜の不気味さを引き立てている様だった。向かいの空き地に生える木々の梢は闇に埋もれ、黒くて巨大な塊が林立して見える様子は、背筋にぞっとした寒気をおぼえそうなものだ。

不意に、小さな泣き声が聞こえた。

呼ばれたような気がしてその音の出所を見やれば、姉が肩を震わせて泣いていた。

どうしたの、と問いかける。

しばらくは返事がなくて、さびしい夜のしじまがより一層身に染みた。

「大好きな友達が、遠くへ引越しちゃう」

小刻みに揺れる肩は頼りなげで、儚いくらいの存在感に、私はいたたまれなくなる。黒くてまっすぐの髪が、姉の小作りの顔を覆い隠すように垂れている。花柄のパジャマはオレンジの街灯に照らされて、黄色っぽく光っていた。右手の袖で顔をこする姿は、抱きしめてあげたくなるほど、切ない。

「ずっと一緒にいられると思っていたのに……」

袖で零れる涙を受け止めると、乱暴に顔を拭う姉。その姉が不意に上げた視線が私の姿を捉えた。

「あれ、まだいたんだ」

驚いたように呟き、濡れた瞳で私を見つめる。私はなんとなくきまりが悪く感じて 黙ったまま、人が泣いている様子を見ていたわけだし 、ひんやりとした夜風に身をよじった。姉は私をじっ

と見つめていたが、やがてやわからかに口元を崩して、微笑んだ。

「なぐさめてくれるの？　ありがとう。さびしいけど……でも、もう二度と会えなくなるわけじゃないんだよね」

そうだよ。またきつと会えるよ。信じていればいつか、必ず。再会はきつと、ものすごく幸せな筈だよ。

「そうだよね。いつまでも落ち込んだままで、泣きはらした目になんて、明日見送ることなんて出来ないよね」

黒くて丸い瞳は、涙できらきらと輝いていて美しかった。まるで、星を浮かべた夜空のよう。

ああ、そういえば今日は夜空を見逃してしまっただじゃないか。つまらないけれど……姉が泣きやんだなら、それでいい。

今日は、ここまで。

夏 その1

先客がいた。

何日かぶりに上った屋根には、鳥が残した糞が白い斑点を残している。何と言ったか ああ、そうだ。今朝のニユースで言っていた”黄砂”のせいだろうか。緑の筈の屋根は、黄色っぽく薄汚れていた。

そんなに汚れた場所であるのに、堂々とした態度で、先客は寝転がっていた。

たしか……名前は、ユウヒ。

隣のおばさんがそう呼んでいたのを思い出す。

ユウヒは私のことを目を細めて見ている。警戒されているのだろうか。けれど、そもそも人の家の屋根で、勝手にくつろいでいる方が悪いだろう。我がものの顔で、でんと寝そべっているユウヒはいかにもふてぶてしい態度だ。

私が少し近づくと、ユウヒはのっそりと体を起こした。そして不機嫌そうな声を上げる。

「オレの昼寝を邪魔する気かよ」

初夏の日差しに照らされて、ユウヒの頭は黄金にも似た栗色に輝いている。神々しいばかりに輝くそれらとは全く異なり、うつとうしそくに私を見る顔は非常に気にくわなかった。

腹がたったのでだんまりを通すと、ユウヒはゆっくりと腰を上げた。今にも飛びかかってきそうだった。

「せつかくいい日向ぼっこだったんだ。邪魔するな」

ふしゅー、と空気が風船から抜けるような、いかにも間拔けた音がしたが、これはあくまでもユウヒが私を威嚇している証拠だ。ちつとも怖くなんてないのに。

夏の匂いを抱いた風が、やわらかに私を撫でていく。いつの間にかもう夏であるのだなあ、としみじみとした感慨に浸っていると、気付けばすぐ傍にユウヒがいた。

白い前歯をちらりと見せて、ユウヒは意地悪くわらった。

「じゃあな」

ああ、最悪だ。

まだ屋根に上ったばかりだったというのに。

夏 その2

どおん、と大きな音が空に轟いた。

驚いて空を見上げれば、ぱらぱらと光の粉が降りそそいできた。真つ赤な大輪の花が夜空に咲いていた。雲一つない黒々とした空には数多の星が輝いているのに、それらをしのぐ眩しいきらめき。そつと夜空に溶け込んでいく花は、きれいだった。

「花火、綺麗だなあ」

私が思ったのとはほぼ同時に、溜め息混じりの少し高い声が響いた。振り返れば、思った通りに姉だった。姉はいつもと同じく、まっすぐで黒い髪を肩あたりまで垂らし、花柄のパジャマを着て立っていた。けれど、いつもと違うのは姉に寄り添うように立つ小さな影。今日は弟も一緒に外へ出てきたらしい。

どおん、どおん。

空が、輝く。それを見つめる姉と弟の顔も、色鮮やかに照らし出される。わあ、と小さく歓声をあげる弟の瞳は、花火になんて負けないくらいきらきらしていた。姉は、そんな弟の様子を見て顔をほころばせている。

私は一度二人から視線を外し、空を見上げる。

しつとりとまとわりついてくるような闇。夜の帳は町に降り、喧噪を鎮め、やわらかな静謐が私たちを抱く。そんな日常をぶち壊し、貫くように響く花火の音。ほの暗さを打ち砕いて、華々しく散る花火の姿。降り注ぐ光の粉は果たして、優しく瞳の中に舞いこむのだろうか。花火を見上げる人々の顔は、どれもこれも輝いている。濡れた瞳が、きらきら、と。

ふと振り返れば、ユウヒがごろりと屋根の上に横たわって、空をじつと見上げていた。今日もこいつは勝手に人の家の屋根に上っているのか。

おどかすように近づくと、今日のユウヒは珍しく大人しかった。小さく欠伸をして、私を目を細めて見る。

「よう。……お前のとこの姉弟、仲いいな」

普段よりも幾分柔らかな声でユウヒが喋った。私が驚きに口を噤んでいると、ユウヒは歯を見せて笑った。

「オレだって、なんとなくしみじみとしたことになることだって、あるんだよ。たまにな」

投げやりだったが、よく耳をこらせば秘めた溜め息が聞こえてきそうだった。

何があつたの、と問おうとした時

どおん

一際大きく響く音。空気の震えがここまで伝わってきそうだった。まあ……今日はここまで、かな。

秋

今日もまた、先客がいた。

夕暮れ時。

人波が家路を辿り始める頃。

もう少しすれば父が帰ってくるだろう。そう思いながら屋根をのぼれば、ユウヒがごろりと寝そべっていた。いい加減それを咎めるのも面倒に思い、そっと傍に寄る。

夕食の匂いを抱く風に惹かれたのか否か、珍しくぼーっとして山の方を眺めていたユウヒは、ゆっくりとこっちを向いて、小さく笑った。

「よう。こんな時間にどうしたんだよ」

姉がさびしがっているんだよ。……弟が風邪をひいちゃったから。

「ああ。そういえば弟が病気なんだって？ 結構ひどい、ってうちのばあさんが、お前んとこの母ちゃんに聞かされてたぞ」

私は驚愕に身を震わせる。何故なら、母は姉に対しては、ほんの大したことのない風邪だ、と言い聞かせていたのだから。

嘘をつくな、とユウヒを睨みつければ、大仰に肩をすくめられた。

「本当かどうかなんて、知るわけないだろ。オレの家じゃなくて、お前の家の話だ」

切り捨てるようなことをユウヒは言ったが、その口調は冷たいものではなく、むしろ温かみを感じそうに思えるものだった。そういえば、ユウヒは弟と仲は悪くない。こいつなりに心配しているのかな、と思う。

気だるげに横たわり、こっちを見るユウヒの瞳は、オレンジの陽光を受けて金色に輝いている。

不意にユウヒは私から視線をそらすと、はじめと同じように山の

ある方角へと顔を向けた。私も黙ってそちらを見ると、ちょうど夕日が山影にかかったところだった。山際に沈んでいく夕日は驚くばかりに美しかった。ゆるい弧を描く山際は金色に輝いている。山の向こう側から放たれる光は、空を紅く染め上げる。

オレンジにぼやける空、うすく紫がかった空、白くぼんやりとした空、まだ昼間の青を残している空。どれも同じ一つの空なのに、ころころと変わる表情のように、ゆったりと移ろっていく色合いは息を呑むほど美しい。細くたなびく雲は、やんわりと身を空に染めている。

日の沈んでいく今、一瞬、ほんの瞬き一つで見逃してしまうような、そんな移り変わっていく風景だからこそ、怖いくらいに鮮烈だった。

「今日は随分と長くいるんだな」

ユウヒがぼそりと呟いた。それはこちらの台詞だ！ という代わりに私は、姉のおかげだよ、と応えた。その返答に満足したのか否か、ユウヒは曖昧な笑みを浮かべてこちらを見た。

きらきらと光る瞳。けれど、その輝き具合はさっきと全く同じものではない。今と、過去と、未来とは、違うものだから。

「こんな壮大なものがさ、オレの名前っていうのはなんだか……変な感じだなあ、と思っただけ」

ユウヒがそつと零した言葉。いつもは傲慢さすらおぼえる口調は陰をひそめて、自信なさげな言葉が風に流されていく。

何かあったの、と問えば、ユウヒは小さく伸びをした。

「いや、別に。ただなんとなく、そう思っただけ。オレたちって驚くほどちっぽけでさ、強い風が吹いただけで、あっという間に掻き消える灯火みたいで」

真剣さを滲ませるその声は、ひどく脆く、しかし強い力を秘めている。

「だけど、やっぱり生きているんだな、って。ぼーっとしてても時間はすぎるし、気付けば今なんてあっという間に過去で。……話

がそれたけど、つまり……なんていうか、名前は過去につけられたのに、現在自分を支えて……」

言いづらそうにユウヒは顔をしかめる。普段はこれほど難しいことを言わないからだろう。慣れないことをしようとするからだ、と突き放したくもなるが、それを上回って、私はユウヒの言葉が聞きたかった。

「今日さ、名前のないやつに会ったんだよ。本人は気にしてないみたいだったけど……可哀相になっちゃまって。名前を呼ばれたらオレは振り返るだろ？ それってつまり、オレがここにいてってことでさ」

ゆっくりと、噛みしめるように言葉を紡ぐユウヒ。そこにはもう、迷いはなかった。

「認められることって、嬉しいよな。だから、どんなに自分の身には余るように思える名前でも、それに見合うようになりたい。認めて、オレの名を呼んでくれる人を大切にしたい、と思ってるさ」

ユウヒの笑顔は晴れやかだった。残光がその顔を、鮮やかに照らし出す。

「そういえばお前の名前って」

ユウヒが思い出したように言った。でも、ごめん。

時間切れみたいだ。

冬

空に、吸い込まれそうな夜だった。

冬の冷たい大気を越え、数えきれないほどの星々が街を吸い上げようとしているように思えた。重力は確かに私達を地に引きつけている筈なのに、ふわふわと天までのぼっていつてしまうように思えるのは何故だろう。抗えそうもない力が私を、引く。

「いけないで」

小さな、震える声が、囁く。

ゆっくりと声の主を見れば、姉が小さな体躯を更に縮めるようにして、膝を抱えてしゃがみこんでいた。その震える肩の原因が、寒さのせいだけではないことは分かっていった。今夜、初雪が降るかもしれない。そうニュースが告げていたことも、分かっていった。けれど、私には姉にかけるべき言葉が分からなかった。

「いけないでよ」

無風の夜は気味が悪いほどに寒々しかった。物音一つしない夜。街灯よりも高い屋根のうえには不寐なオレンジの光は届かない。

寝静まった町で、けれども姉の心は鎮まることを知らないことだつて、分かっていった。けれど一体私に何が言える。いいや、何も言えやしないのだ。

私の言葉は、姉には”届かない”。

姉が気休めの言葉が必要としていないことも、分かっている。

「約束したのに。雪が降ったら一緒に雪だるま作ろうって。入学式にはきつと、一緒に桜の門をくぐろうって。……嘘つき、嘘つきっ！」

悲痛な叫びが夜のしじまを切り裂く。

ああ、私には何も出来ないのだ。何一つしてやれない。無力な自

分がうらめしい。

にやあ、と鈴を鳴らすような高い声が響いた。

姉が大きく肩を揺らす。”ユウヒ”が姉の傍にゆつくりと寄り添った。ごろごろと喉を鳴らしながら、頬を姉のパジャマにこすりつけるユウヒ。私の目に、おずおずと顔を上げる姉の顔が映った。

「ユウヒ？　なぐさめてくれるの？　……ううん、駄目だよ。お願いだから一人にして。悲しいのは私なの。さびしいのは私なの。確かに一緒にいたんだ、って……この痛みが愛しいの。このままでずっといたい……だから」

ふにやあ、とユウヒは強く鳴いたかと思うと、姉の白く滑らかな手の甲を引っかいた。止める間もないほど一瞬のことで、姉は何が起ったのか分からなかったようだ。ややしばらくしてから、姉はゆつくりと目を見開いた。

「ユウヒ？」

震える呼び名。

ユウヒは、姉の抱えた膝と胴の間にひらりと身をよじらせて、素早く潜りこんだ。そして幾分きついままざしで姉を射る。姉はそうとユウヒを見つめ返す。

『オレはいるよ。あいつも、あんたの笑顔が好きだったろ』

姉がゆつくりと目を瞬いた。言葉は通じない筈なのに　それなのに。

『オレはここにいるよ。今はまだ、いけないよ。だから泣くなよ。ずっとずっと一緒になんて、いられない。だけど、だからこそ、一瞬、一秒ずつが大切なんだろ。オレも短い命なりに大切にしたい。最期に、幸せだった。そう言えれば、いいだろ？』

ずっと喋り続けていたわけじゃない。ただ、片言のようにゆつくり、噛みしめるように話すユウヒは、私には輝いて見えた。こんなに真っ暗な夜なのに、思い浮かぶのはあの日の夕日。

こいつはきつと、自らの名前を呼ぶ姉を大切に思ってくれているんだ。そう、確信する。

『あいつは幸せだったよ、きつと』

にゃあ、と小さく響く声。

姉がぎゅうつとユウヒを抱きしめた。小さく震える肩。その肩越しにこちらを見据えるユウヒは、やわらかな笑みを浮かべ、素早く一度 ウィンクをした。

「大好きだった ううん、大好きなの。いつだって私の後ろをついてきて。煩わしく思った時だってあった。叱られる時はどんなに弟が悪くても、いつも姉が叱られる 不公平だと思ってた。でもね、だからこそ私が守ってあげられた。私には責任があったの。真っ先に叱られ、それでも姉であり続けるっていう」

溢れる思いは優しく、強く。地球上の重力は、今度は姉に向かっているんじゃないか。そう思えるほど強く引かれる。だけど…。

「大好き、なの。そして私は幸せだった。大切だった。だから、ね。ユウヒ。今日だけは泣かせてね。明日からはきつと、ちゃんと前を向いて歩くよ。笑顔で……いつまでも、姉として」

にゃあ。嬉しそうにユウヒが鳴く。

けれど、その声もう遠い。空が私を呼んでいる。高く、高く、どこまでも昇って。

星を散りばめた天上。弟もいるのかな、と思う。姉が行けない場所ならば、私がいに行こう。そして弟もきつと、笑顔で迎えてくれる筈だから。

高く、高く、空に呼ばれて。

そう 屋根より高く。

春 再び

私は今日も屋根へのぼる。

また、春が巡ってきたのだ。

世界は鮮やかに色づきながら、深い眠りから目を覚ます。大空に向かつてまっすぐに立つ木々は、その両手を思いつきりあの太陽まで突き上げる。風に唄い、その身を躍らせる花々は、満面の笑みを太陽に向ける。

太陽が羨ましい。そう思ったこともあった。しかし、結局のところ私は私のままだ。私の名を呼ぶ誰かがいる限り、私は私であり続けるだろう。そしてその誰かを大切にしたいと願うのだ。今を幸せに生きたいと、そうあることが出来るように祈るのだ。

雪が融けたての屋根はきれいな深緑だ。そしてまた、例のごとく先客はいるのだ。あたかな日差しに、この上なく心地良さそうにまどろんでいる栗色の猫が一匹、ごろりと屋根の上に転がっている。ゆったりと揺れる長いしっぽは、風に揺れる花によく似ている。

「あ、お前か。久しぶりだな」

そうだね。姉はあれからずっと忙しくしていたから。

「だけどオレもよく頑張ったよな。本当はさ、人間を諭すようなタチじゃないのに」

あの冬の日のことを思い出して、ユウヒはひどく誇らしげだった。ぴんと張ったひげがそよそよと風に揺れている。優しい春風に私は身を委ねる。やわらかな日差しに溶けてしまいそうだ。

「お前もまあ、割と頑張ったと思うよ。……知ってたんだろ？」

あの姉がお前に”会う”時は、辛いことがあった時だってさ」

そういうユウヒこそ気づいていたのか。そう感慨深く思ってたそつと身を揺らすと、ユウヒはにやあと鳴いた。

「ユウヒ」

優しい声がユウヒを呼ぶ。嬉しそうに身を起こし、ユウヒは姉に飛びついた。それを見て破顔する姉。ああ、良かった。そう、しみじみと思う。久しぶりに会った姉は少し大人びていて、けれどもあの頃とほとんど変わらない笑顔をしていた。この笑顔を見るたびに、泣きじゃくっていた弟もまた、つられて笑顔になるのを私は知っていた。まるで、太陽のようだと思う。人を惹きつけ、大勢に笑顔を向けられ、支えられている。

ぎゅうとユウヒを抱きしめていた姉が、思いがけなくこっちを見た。どきん、と身を強ばらせる。しかし、その必要はなかった。

「ありがとう」

何に對しての感謝なのか。……いや、そもそもこれは私に向けられたものなのか分からなかった。けれどまっすぐに私を見て微笑む姉は美しく、日の光を浴びて輝いていた。

「ここにいれば空が近いでしょ。あの天にいるのかな、って思ったら、少しでも高い場所にいたくって。私達屋根が大好きだったし、それにここからなら、吹けば”想い”も届くかな、と思って」

姉はそう言つて、ポケットから緑の小さな棒を引っ張り出した。よくよく見れば先端は王冠のような形をしており、中は空洞で突き抜けていた。そうしてもう一つ、ピンクの小さなボトルを引っ張り出した。

「お母さんが買ってくれて。さびしかったり、悲しいときはいつも、大きいのを一つだけ。”想い”を吹き込んで風に流すの。どうか届けてください、って」

姉はそう言いながら、ボトルから黄色い蓋を剥がしとった。そして緑色のストローをボトルの中にそつと差し入れる。

「いつもベランダからが多かったから。それにすぐに消えちゃうのを見るのはさびしいからって色々混ぜ物をしてみたけれど……やっぱり終わりまで見届けたいし。だから今日は久しぶりに屋根の上から。ほら、あの花火の日と 初雪の日以来の」

何度か出し入れしたストローをそつとボトルから引き抜くと、姉はそれをくわえた。ゆつくりと息を吹き込めば、姉の”想い”が膨れ上がる。日の光を浴びて七色に光る。

不意にストローから離れると、優しい春風に抱きこまれた”想い”は、ゆつたりとその場を漂った。

歌が、聞こえた。

花が風にそよぐ音ではなく、優しく澄んだ声で。

ああ、私の名を呼んでください。大切に”想う”から。

しゃーぼん玉飛んだ。屋根まで飛んだ。

屋根まで飛んで……更に、高く、高く。

あの、空まで。

了

春 再び（後書き）

ここまで読んで下さり、本当にありがとうございました。

何か書きたい、と思い立ち、二時間で書き上げ、推敲しながらの投稿でしたので……様々な不備はあると思います。

けれど、少しでも楽しんで頂けたなら幸いです。

主人公が”もの”なので大変でした。

情景描写、心理描写の練習に、とも思っ書いた作品です。批評・感想お待ちしております。

二月二十日 北咲 希

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6970d/>

屋根より高く

2010年11月14日09時37分発行